

北海道から沖縄まで足を運び、5万枚近く撮影してきた。タウンページを引張りだし、全国の百貨店・デパートと名の付くところに片っ端から「子どもと遊びに行きたい」と電話をかけ、撮影場所を探した。

初めは、デパートの屋上につきもののパンダカーやレトロゲームなどを風景として撮影していた。しかし、できあがった写真を見ているうちに廃虚の景色と変わらない気がしてきた。札幌オリ

ンピックがあった1997年に作られたピンボールがそのまま置かれたところもあるのだ。画面に人を入れるようになったのはそれからだ。

新しい興味を持ったのが、遊園地の延長線上にあるとも言える公園の遊具だ。それも金属製のシ

オブジェが姿を現す。撮影は1人で行うため、深夜に及ぶことも多い。不審者と間違えられて通報され、警察に職務質問を受けることも珍しくない。団地にある遊具の撮影では、邪魔な石をどかした際、「ドスン」と大きな音がしたため、誰かが飛び降りたのではないかと心配した住人が、一斉に起きたしてこられた。申し訳ない。

その日、私は東京の渋谷の東急東横店の屋上で妻を待っていた。子どもが走り回る横で、サボっているとおぼしきサラリーマンが気持ち良さそうに寝ている。やかましい都会の中心にあるとは思えないぐらいほっとする空間がそこには広がっていた。「この風景を撮りたい」。就職が決まっていた都内の写真スタジオに辞退の連絡をし、フリーの道を選んだ。

台湾にまで足を運ぶ。台湾にまでわざわざ撮影に行ったこともある。下調べが甘く、1度目は閉まっていた。2度目の訪問で目の当たりにした屋上は、観覧車あり、モノレールあり、日本とよく似ていた。ただ、規模は日本よりかなり大きく、色使いが赤を基調とした原色だったのに驚かされた。

気をつけてきた。札幌オリオンピックがあった1997年に作られたピンボールがそのまま置かれたところもあるのだ。画面に人を入れるようになったのはそれからだ。

私の好みは、鮮やかに着色したものより、コンクリート感むき出しのタイプ。レトロな雰囲気はデパートの屋上と共通するものがあり、今の遊具にはない芸術性と遊び心が詰まっている。

安全基準を満たさず撤去屋上の遊具と同じように、こちらも年月がたち、今の安全基準を満たさないと、だんだん撤去され始めている。撮影場所はネットのストリート

姿消す遊具 追憶のフォト

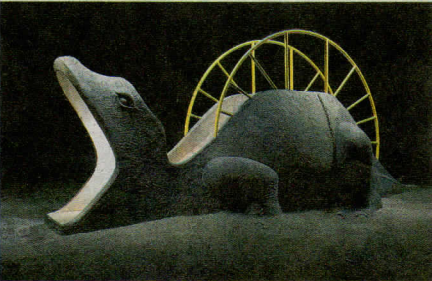
◇百貨店の屋上や夜の公園で撮影、不思議なオブジェに

木藤 富士夫

2015.8.21日



遊具自体の造形を際立たせるため、少し変わった方法で撮影している。撮るのは日が暮れてから。被写体にストロボを当て、角度を変えながら何度もシャッターを切る。それらをデジタル合成し、上の写真のように背景から遊具だけが浮き上がったような視覚効果を出す。すると不思議な



恐竜型の遊具 (東京都町田市の薬師台青空公園)

屋上遊園地はほとんど姿を消している。始めた頃は100力以上あったが、現在も残るのは20弱ではないだろうか。観覧車などがある大型の施設となると、5力程度の滑り台などではなく、昔ながらのコンクリート製の遊具だ。足が八方に広がるタコの滑り台は、少子化で利用者が減っ

た。鬼の顔から電話機までコンクリート遊具のほとんどは一点物だ。同じタコのモチーフでも形はそれぞれ異なる。多くは高度経済成長期に建てられた。ハトの滑り台、大きく口を開けた鬼の顔、昔懐かしいプッシュホン型の電話機まで実に様々な形があり、一見どうやって遊ぶのかわからないものすらある。

ビュリーなどを駆使して選定するが、行ってみたら撤去されていたという場合もままある。子どもたちが素晴らしいデザインの遊具を目にする機会が減っていくのはとても残念なことだ。

最初は意識していなかったが、今は消えゆくものを残したいという思いが強い。写真家の仕事は誰かが作ったものを残す仕事でもある。どこか懐かしい屋上の風景やベンキが剥げ色あせた遊具。写真は私のホームページで公開している。興味を持ったなら、ぜひ足を運んでみてほしい。(きどう・ふじおフリーカメラマン)